

「難波の祓」考

青木 真知子

平安朝の物語の世界で、難波の祓が描かれているのは、古くは『大和物語』である。また、『源氏物語』、『栄華物語』にも、その描写がみられる。一方、和歌の世界においては、難波の祓の用例はほとんどみあたらない。勅撰集における祓という用語に関していえば、「六月祓」で夏の巻末を飾るのは『後撰集』からのことになる。その後、平安朝後期の『千載集』において、罪や穢れを除く川祭の名称である、「夏越祓」「六月祓」「夏祓」が歌題として定着するのである。

難波の祓は、古来、七瀬の祓の一つとされてきた。七瀬には、三種あるという。『河海抄』や『藻塩草』によると、河合、一條、土御門、近衛、中御門、大炊御門、二條の末を洛中の七瀬とし、難波、農太、河俣、大島、橘小島、佐久那谷、辛崎が洛外の七瀬と記されている。洛外の七瀬は単に七瀬とよばれ、洛中の七瀬は賀茂川七瀬と称された。三種目の七瀬は、川合、耳敏川、松崎、石影、東瀧、西瀧、大井川で、『公事根源』、『簾中抄』、『拾芥抄』などの資料によれば、これは霊所七瀬と名づけられている。

その儀式は、朝廷で毎月または臨時に、天皇の厄災を移した撫物を七人の勅使が七瀬にもってゆき、それを流して祓をするというものである。七瀬の祓の当日、陰陽師から人形を進せさせ、女房がこれに衣を着せ、上臈の女房が天皇に奉る。天皇はこれに息をかけ身体を撫でて返す。その人形を折櫃に入れたものを、七瀬にて陰陽師が流して祓をするのである。公卿たちもこれに倣って七瀬の祓を行なったという。村上天皇が、応和三年(九六三)七月二十二日に、天文博士の賀茂保憲をして、難波湖および七瀬に臨んで祓をさせたというのが、その始まりとされている。

一条兼良(二四〇二〜一四八二)が著した源氏物語の注釈書である『花鳥余情』では、『源氏物語』「濔標」の巻に描かれている「なにはの御はらへ」について、「代始に八十嶋祭は難波にてあり 典侍の人御衣をもちて参向して解除する事あり これみな難波のはらへの例也」という記述が確かめられる。

八十嶋祭とは、天皇の即位礼の翌年に行なわれた皇位継承の儀式の一つである。一代一度の大祓であり、平安時代から鎌倉中期まで行

なわれている。「延喜式」には、臨時祭との規定がある。八十島は多くの島の意であり、難波とよばれるあたりには、多数の大小の島々があるため、その八十島を大八州に見立てて、その大八州を統治する天皇を島々の霊が祝福し、天下の平安を祈るものという。^③『新後撰集』巻二十・賀歌には、後鳥羽院の八十島祭のおりの、津守経国の次の和歌がみえる。

後鳥羽院御時、やそしまのまつりによりみ侍りける

あめのしたのどけかるべし難波がたたみののしまにみそぎしつれば(二六〇四)

後鳥羽天皇の即位は、寿永二年(一一八三)のことであるから、八十島祭はその翌年の出来事となる。経国の和歌によまれた「たみののしま」は、「田蓑島」のことで、八十島にはこのほか、曾根州、中之島、福島、柴(くに)島などの名が知られる。

『花鳥余情』に「典侍の人御衣をもちて参向して解除する事」とあるのは、八十島祭の使に関する記述だと解される。八十島祭の使は、八十島祭使または八十島使とよばれるが、典侍がその使を命じられるのが通例であった。八十島使の典侍が、御衣の宮を披き、海に向かつてこれを振り、祓の儀式を終えたのち祭物を海に投じたという。中世以降このような祭儀が行なわれたようで、『花鳥余情』の注釈は、その様子に言及したものとされる。「解除(はらひ)」は、罪や災いを祓うことで、『万葉集』巻六・雑歌・九四八番の歌に、「千鳥鳴くその佐保川に 石に生ふる 菅の根取りて しのふ草 解除(はら)へてましを 往く水に 禊ぎてましを」という用例がみえている。

難波の祓は、朝廷儀式から公卿に普及した七瀬の祓や、八十島祭の祓で知られる一方、海や川などにおける水辺の潔斎の場としての普遍性ももっている。難波の祓や住吉の祓は、都人のあいだの日常的祈事という側面も有しているのである。たとえば、『摂津名所図絵』の有栖山新清水寺の記事には、「むかし齋宮女御 難波の祓所田蓑島にてありし也」とあり、齋宮女御(九二九、九五)が田蓑島で難波の祓をしたことが記されている。

本稿では、禊祓祈事である難波の祓のこのような背景を念頭にしながら、物語と和歌における難波の祓の諸相を考察してみたい。

二

齋宮女御より以前の、難波の祓に関する記載のある平安期の歌人は、伊勢(八七七頃、九三八頃)である。伊勢の『拾遺集』巻六・別に採られている次の歌は、和歌における数少ない難波の祓の例でもある。

なにはにはらへし侍りて、まかりかへりけるあか月に、もりの侍りけるに、郭公のなき侍りけるをききて

郭公ねぐらながらのこゑきけば草の枕ぞつゆけかりける(三四四)

この歌は、正保版歌仙家集本『伊勢集』にみえるが、私家集大成では、郭公ねぐらながらの声きけば草の枕ぞ露けかりける(五〇二)

とあるのみで、詞書はない。難波の祓の帰路によまれたという詞書をもつ伊勢集が存在したのかどうかは不明であるが、和歌の内容は旅が主題となっており、特に難波の祓やその神事との関連は認められない。

『拾遺集』では、伊勢のこの歌の前に、貫之の次の歌が配置されている。

たみののしまのほとりにて雨にあひて

雨によりたみののしまをわけゆけど名にはかくれぬ物にぞ有りける(三四三)

この歌は、正保版歌仙家集本『貫之集』にあるものだが、その作は次のとおりである。

なにはのたみののしまにて雨にあひて

雨によりたみのの島をきてみれば名にはかくれぬ我身なりけり(八〇七)

『拾遺集』の三四三番の歌とは、上の句、下の句ともに異同がみられる。勅撰集への入集は、『古今集』が先行しており、卷十七・雑上に採られている。

なにはへまかりける時、たみののしまにて雨にあひてよめる

あめによりたみのの島をけふゆけど名にはかくれぬ物にぞ有りける(九一八)

「けふゆけど」には、「二本に、きたれども」の注が付されており、貫之集の表現に近いものになっている。

正保版歌仙家集本『貫之集』、『古今集』、『拾遺集』のいずれにも、「難波の祓」の語はないのだが、これは難波の祓のオりの詠歌とみるべきであろう。技法としては、上の句の、「田蓑」の地名と「蓑」、「来て」と「着て」との掛詞が、田蓑島に来ることによって蓑を着たという重層表現を支えている。下の句には「名には」と「難波」の掛詞が使用されており、田蓑島と難波の祓との関係性を考えると、田蓑の島へ出かけてきた目的が、難波の祓であったと解されるのである。『拾遺集』が、難波の祓の詞書をもつ伊勢の作と並べていることも、その傍証となる。

貫之の「あめにより」の歌は、「難波の祓」の語はなくとも、そのオりの作と判断されるものである。伊勢の「郭公」の歌の場合は、『拾遺集』には「難波の祓」という詞書があるが、その内容においては、「祓」への意識は希薄である。むしろ、「ねぐらながら」の「ながら」から「長

柄」につながる技巧によって、「難波」という名所への連想が強くはたらく表現になっているといえる。伊勢には、『古今集』卷十九・雑体・俳諧歌に採られた、

なにはなるながらのはしもつくるなり今はわが身をなにしたとへむ(一〇五)

の作があるが、「なにわながら」の語感を生かした「難波」と「長柄」との地名の連鎖の例は、『後拾遺集』卷十八・雑四に採られた赤染衛門の次の歌などにもみられる。

天王寺にまゐるとてながらのはしをみてよみ侍りける

わればかりながらのはしはくちにけりなにはのこともふるかなし(一〇七三)

「難波」も「長柄」も、「生田」「昆陽」「住吉」などととも、津の国に導かれる地名であるから、「なにわながら」の連鎖もそのことを前提に発生したものであろう。また、平安歌人たちが「長柄の橋」を重要な歌枕として認識していた影響もあると思われる。

難波という歌枕は、「名には」「何は」と掛ける例が多く、「長柄」との組み合わせも通例であった。また、「難波」と「葦」、あるいは、「長柄」と「葦」とをよんだ例も数多い。「葦」に「悪し」を掛ける技法も多用されているものの一つである。

難波は、そのほかに、難波江、難波潟、難波堀河、難波津、難波の御津、難波の浦、難波女、難波人、難波船などの形でも、万葉集以来よみつがれている歌枕の一つである。「難波の祓」に限定される和歌が少ないのは、それが、「難波」という歌枕のもつ和歌世界へと拡大されてしまい、祓という神事に伴う和歌という性格が明確化されなかったことにその原因があったと考えられるのである。

三

難波の祓に限定すると、その和歌は少ないが、祓を主題としてよまれた和歌は数多くある。私家集における、祓、夏祓、夏越祓、六月祓をよんだ歌をとりあげても、貫之(生年未詳、九四五)、中務(九一〇頃、九八九頃)、忠見(生没年未詳)、為信(生没年未詳)、好忠(生没年未詳)、千頼(生没年未詳)、能宣(九二二、九九二)、紫式部(九七〇頃、没年未詳)、和泉式部(九七〇年代、没年未詳)、伊勢大輔(生没年未詳)などの歌人の名がある。

みなつきはらへ

(a) みそぎする河のせみればから衣ひもゆふぐれに波ぞ立ける (正保版歌仙家集本貫之集、一一、『新古今集』卷三・夏歌、二八四)

はらへしたるところ

(b) 此かにははらへてながすことのはは波の花にぞたぐふべらなる (正保版歌仙家集本貫之集・一〇七)

六月はらへ

(c) みそぎつつ思ふ心は此川のそこのふかきにかよふべらなり (正保版歌仙家集本貫之集・三九四)

なつはらへ

(d) 河やしろしのにをりはへほす衣いかにほせばかなぬかひざらん (正保版歌仙家集本貫之集・四〇六、『新古今集』卷二十・神祇歌・一九一五)

六月はらへ

(e) おほぬさの河の瀬ことにながれても干とせの夏はなつはらへせん (正保版歌仙家集本貫之集・一三三)

みなつきはらへするところ

(f) きみがためいのるころはみなかみもながることくけふやしるらむ (西本願寺蔵三十六人集本中務集・五七)

六月、かはのからすをり

(g) みなつきのなごしはらふるかみのことみつのころはなきやしぬらむ (西本願寺蔵三十六人集本忠見集・二二)

六月つごもりに、うらみてあはぬ人に、おほぬさにつけてやる

(h) おほぬさにきみがころのあらませばけふはなごしのはらへしてまし

返し

(i) はらへするくさひとがたのすがぬきはしりへしそきぞまつせられける (書陵部蔵本為信集・一三九・一四〇)

夏十

(j) みなつきのなごしとおもふころにはあらぶるかみぞかなはざりける (天理図書館蔵本曾祢好忠集・三八八)

夏十二首

(k) みなつきのなごしのはらへするせせにあさはなたなるそぬきみゆらし (穂久邇文庫本千頼集・二二)

六月、河原にはらへし侍ところ

(l) かはなみもなごしのはらへするけふはうかぶかげさへのどけかりけり (西本願寺蔵三十六人集本能宣本・三九七)

やよひのついたち、かはらにいでたるに、かたはらなるくるまに、ほうしのかみをかうぶりにて、はかせたちをるをにくみて

(m)はらへとのかみのかぎりのみてぐらにうたてもまがふみみはさみかな (実践女子大学蔵本紫式部集・一四)
夏

(n)きよきせになごしのはらへしつるよりやを万代はかみのまにまに (榊原家本和泉式部集・三三二)

(o)わすれぬとつみうる心ちする物をけふのみそぎにはらへすてん (榊原家本和泉式部集・六〇二)

六月、川原に祓しにいきたるに、魚をとるをみて

(p)かはのせにつりする人のつみをさへはらひすてつる今日にも有哉 (榊原家本和泉式部集・五三七)

六月はらへ

(q)みなかみもあらぶる心あらじかしなみもなごしの身そぎしつれば (伊勢大輔集・四〇、『後拾遺集』卷三・夏歌・三三四)

このうち、貫之の(a)の歌は、「唐衣ひもゆふぐれになる時はかへすがへすぞ人は恋しき」(『古今集』卷十一・恋一・五一五、よみ人しらず)を本歌としたものであり、『新古今集』入集歌でもある。『新古今集』では、夏歌の部の卷末に据えられている。(b)の歌、(e)の歌をそれぞれ本歌にしたと思われるものに、信明の「水上に祓へて流す言の葉を折り長くこそ瀬々の白波」(正保版歌仙家集本信明集・三六)と、能宣の「みそぎする川の瀬ごと引く綱を大幣なりと人や見るらむ」(西本願寺蔵三十六人集本能宣集・八七)の作がある。(d)の歌も、後に有家・家隆などによって『新古今集』の卷二十・神祇歌に採られている。この歌も卷末におかれているものである。久保田淳氏の『新古今歌人の研究』には、釈阿の作である「五月雨は雲間もなきを河やしういかに衣をしのにはすらん」(『続拾遺集』卷三・夏歌・一八〇)は、この貫之の歌に基づくものであるとの指摘がある。⁵⁵

伊勢大輔の(q)の作は『後拾遺集』入集歌で、夏歌の卷末に配置されている。「みなかみ」に「水上」と「水神」を掛けている手法は、中務の(f)の作と同様である。また、「水」・「波」の縁語を取り入れ、「夏越」と「和し」とを掛詞にし、そのうえ「あらぶる」と「和し」とを対置させた技巧的な様相をみせている。

(1)の紫式部がよんだ祓は、詞書に「やよひのついたち」とあるので、夏祓ではなくて、毎月の祓か臨時の祓のことであろう。夏祓は屏風歌にもとりいれられており、勅撰集においても、『後拾遺集』で夏の卷末に置かれ、『千載集』以後夏の歌題として定着することになるが、その定着化は、紫式部の歌にみるような、祓の神事の日常性を基盤にしていることはいうまでもないだろう。

勅撰集では、『後拾遺集』以前にも、『後撰集』、『拾遺集』において、「夏祓」をよんだ、次のような歌が採られている。⁵⁶
みな月ばらへしに河原にまかりいでて、月のあかきを見て

かも河のみなそこすみててる月をゆきて見むとや夏ばらへする (『後撰集』卷四・夏・よみ人しらず・二二五)
題しらず

みな月のなごしのはらへする人は千とせのいのちのぶといふなり (『拾遺集』卷五・賀・よみ人しらず・二九二)
また、『新古今集』卷三・夏歌の部の卷末に据えられているのは、前述の貫之の作、

みそぎする河のせ見ればから衣日もゆふぐれに浪ぞ立ちける(二八四)

であったが、「六月祓」が歌題として定着した『千載集』で、卷三・夏歌の卷末におかれているのは次の三首である。

百首歌たてまつりける時、六月祓をよめる

けふくればあさのたちえにゆふかけて夏みな月のみそぎをぞする (藤原季通朝臣・二二三)

いつとてもをしくやはあらぬとし月をみそぎにすつる夏のくれかな (皇太后宮大夫俊成・二二四)

六月祓をよめる

みそぎする川せにさよやふけぬらんかへるたもとに秋かせぞふく (よみ人しらず・二三五)

これらの夏祓の和歌では、「水」との縁語を用いて、水の流れに清澄な心境を託したり、清浄を祈ったりする内容が多く占められていることがわかる。あるいは、『拾遺集』二九二番のように、祓をすると千歳の命を延ぶという信仰をよむ場合や、そのほか、「罪」「穢れ」「祓」「神」などの、神事に関する表現も多い。

このように、夏祓の和歌については、神事に関連してそのおりの感懐をよむ傾向が指摘できる。また、技巧的にも洗練がみられ、古歌を基に新たな創造が展開してゆく過程をいくつか追うことができる。そのような夏祓の歌の広がりの中にあつて、「難波の祓」の和歌は、独自性を発揮する要素がもてなかつたのではあるまいか。その結果、「難波の祓」の和歌は、歌枕として名高い「難波」をよんだ「難波の歌」と、「夏祓」を主題とする「夏祓＝祓の歌」とに吸収されてしまい、和歌の対象としての独自性が薄れてしまったものと思われるのである。

四

『大和物語』の百四十八段は、芦刈説話とよばれる章段であるが、そこには難波の祓について、次のように記されている。⁸⁰⁾
かかるほどに、この宮仕へする所の北の方うせたまひて、これかれある人を召し使ひたまひななどする中に、この人を思つたまひけり。思

ひつきて、妻になりにけり。思ふこともなく、めでたげにてゐるに、ただ人知れず思ふことひとつなむありける。「いかにしてあらむ。あしうてやあらむ。よくてやあらむ。わがあり所もえ知らざらむ。人をやりてたづねさせむとすれど、うたてわが男聞きて、うたてあるさまにもこそあれ」と念じつつありわたるに、なほいとあはれにおぼゆれば、男にいひけるやう、「津の国といふ所の、いとをかしかなるに、いかで難波に祓へしがてらまからむ」といひければ、「いとよきこと。われももるともに」といひければ、「そこにはなものしたまひそ。おのれひとりまからむ」といひて、いでたちていにけり。難波に祓へして、かへりなむとする時に、「このわたりに見るべきことなむある」とて、「いますこし、とやれ、かくやれ」といひつつ、この車をやらせつ。家のありしわたりを見るに、屋もなし人もなし。「いづかたへいにけむ」と悲しう思ひけり。

芦刈説話は、貧しさゆえに別離した夫婦が、数年後に対照的な姿になって出会う物語であるが、『大和物語』は、女の境遇を中心にした構成となっている。夫との別離ののち、女は京に出てある貴族に仕え、その北の方の死後、主人の妻となる。だが、元の夫のことが心を離れない女は、難波の祓を口実にして津の国に夫の消息をたずねに出かける。祓をすませたのち、芦刈りの男を見つけると、それが元の夫であった。男も相手が別れた妻であることに気づき、みすばらしいわが身を恥じて近所の家に入り込み、竈の後ろに隠れる。男は、

① 君なくてあしかりけりと思ふにもいとど難波の浦ぞすみ憂き
と歌を書き付け、女に届ける。その文を読んだ女は、たとえようもなく悲しくなつて泣いた。この説話は、「さて返しはいかがしたりけむ知らず」と締め括られている。

『大和物語』には、このあとにさらに女が、

② あしからじとてこそ人のわかれけめなにか難波の浦もすみ憂き

の返歌をよんで京に帰るといふ記述があるが、この末尾は後人による追記と推定されている。

芦刈説話はその主題の哀切さゆえにか、その後多くの作品にとりいれられていることは、よく知られているところである。『拾遺集』巻九・雑下・五四〇・五四一、『今昔物語集』巻三十第五、『宝物集』巻第三、『源平盛衰記』巻三十六、『神道集』巻第七ノ四十三、謡曲の『芦刈』などがその例であり、近代小説にも、谷崎潤一郎の『蘆刈』のような作品がある。

そのなかでも、『大和物語』と関連の深いのは『拾遺集』である。『拾遺集』の和歌は、『大和物語』から撰歌されているので、女と元の夫との再会の契機としての「難波の祓」の記述も、そのまま踏襲されている。『拾遺集』巻九・雑下では、①②の歌の並びは次のようである。

なにはにはらえしにある女まかりたりけるに、もとしたしく侍りけるをとこのあしをかりてあやしきさまになりてみちにあひて

侍りけるに、さりげなくてとしごろはえあはざりつる事などいひつかはしたりければ、をとこのよみ侍りける
君なくてあしかりけりと思ふにもいとどなにはの浦ぞすみうき(五四〇)

返し

あしからじよからむとてぞわかれけんなかなにはの浦はすみうき(五四一)

また、宮内庁書陵部本『拾遺抄』の巻十・雑下には、①の歌のみが採られているのだが、詞書に関しては、

なにははらえしに或をんなのまかりたりけるに、もとしたしく侍りけるをとこのあしをかりてあやしきさまに成りて道にあひ
て侍りけるに、をんなさしりげもなく、としごろあはざりつることなどをよそにいひつかはしたりければ、このをとこのよみ
侍りける

君なくてあしかりけりとおもふにはいとどなにはのうらぞすみうき(五三〇)
とあるように、大きな変化は認められない。

ここでは、『大和物語』とそこから撰歌している『拾遺集』においては、芦刈説話の構成要素として、「難波の祓」が機能していることがわかる。このことは、同じく芦刈説話を主題とする『今昔物語』と比較してみると、いつそう明らかとなる。『今昔物語』の場合、難波で芦刈りをしている元の夫と再会するきっかけは、女の再婚相手が摂津守に就任したことになっており、難波の祓への言及はない。再会の伏線は、その摂津守が妻を伴って摂津国に下ってきたおり、難波のあたりで野遊びをしたことであり、それは難波の浦の景色を愛でることを目的としたものである。落魄の旧夫と立身した妻という対比を結ぶのが「難波」という土地であることは『大和物語』の物語構造と同様であるが、そこでの「難波」の認識は、景勝の地というものであり、難波の祓という神事の影は消えている。

世阿弥の作とされる謡曲の『芦刈』においても、主眼となっているのは、「難波」をよんだ和歌であり、和歌がなかだちとなって夫婦がめでたく再縁する話を通じて、和歌の徳が語られる。典拠とされている和歌には、「難波の御津」をうたった、『古今集』巻十三・恋歌三、よみ人しらずの歌、

君が名もわがなもたてじなにはなるみつともいふなあひきともいはじ(六四九)
のほか、『後拾遺集』巻一・春上、能因法師の次の歌、

こころあらむ人にみせばやつくのなにはわたりのはるのけしきを(四三)
があり、さらに、『万葉集』の人麿の歌を元にした、『拾遺集』巻十四・恋四の、

なには人あし火たくやはすすたれどおのがつまこそとこめづらなれ(八八七)

などがみえている。また、「難波」という地名と和歌の道を繋ぐものとして、『古今集』⁽⁸⁾仮名序にある、
 なにはづにさくやこの花ふゆごもりいまははるべとさくやこのはな

の和歌が引かれている。このような古歌を含めて、難波をめぐる用語には、「難波の浦」「難波の葦」「難波江」「難波船」「難波人」「難波津」「難波女」「難波江」などが『芦刈』には記されているが、そこに「難波の祓」はとりあげられていないのである。

これらのことから、芦刈説話においては、「難波の祓」は、『大和物語』の物語世界においてのみ、意味あるものとして機能しているといつてよいだろう。

書陵部本『拾遺抄』に②の「あしからじ」の歌がないことについては、もともと『大和物語』になかったからだと考えられている。『大和物語』諸本のうち勝命本系統の一本に、「きみなくて」の歌に続いて、「拾遺ニ返歌あり 無此物語 如何」とあることも、この推定を裏付ける根拠とされる。

②の和歌は、もともと『大和物語』にはなかったのだが、『大和物語』本文の変化の過程で末尾に書き加えられたという成立事情があるにしろ、①と②の和歌がともに物語によって生み出されたものであることに変わりはない。そしてその和歌表現は、「難波の祓」に言及したものでなく、難波という地名が想起させる世界に及んでいるのである。たとえば、「葦」と「悪し」の掛詞、「悪し」と「住みよし」との対置手法、「住み憂し」と「住みよし」を対比させ、そこに「住吉」を連想させる構造などは、「難波の和歌」の典型とみなされる。

『大和物語』に描かれている「難波の祓」は、都のある貴族の男の妻となった主人公の女が、故郷である津の国の、おそらく中流くらいの貴族であった元の夫をたずね行く旅を成立させる要因なのである。「難波の祓」は、平安朝における女の旅を動機づける要素の一つであるという側面をもつものといえよう。平安王朝期には、物語をする女が、和泉式部、赤染衛門、孝標女、道綱母など、多く存在した。物語も難波の祓も、下向する旅である。『大和物語』の主人公の女に下向の旅の女の像を重ねるのは、想像が過ぎるであろうか。

五

『源氏物語』では、難波の祓は四例を数え、「明石」に一例、「滞標」に二例、「少女」に一例みえている。

「明石」の巻では、源氏は帰京の途次に難波の祓をし、住吉詣にも使者をさし向けている。そのおり、無事に帰京したあかつきには、旅

の途中で住吉の神にさまざまな願をかけたそのお礼の参詣をすることを誓っている。そのことを受けて、「滯標」の巻で、源氏の住吉詣が描かれるのである。そこに偶然、明石の君も住吉詣に来合わせるが、源氏の一行の威容に気圧されて、遠くより社を拝むにとどめ、せめて難波で祓だけでもしようと船を漕ぎ向ける。そのことを知った源氏は、明石の君との宿縁に感慨を深くする。その源氏もまた、住吉の神に願ほときの参詣をしたのち、難波に祓をするのである。その描写を次に引く。

御社立ちたまひて、所どころに逍遙を尽くしたまふ。難波の御祓などことによそほしう仕まつる。堀江のわたりを御覽じて、「いまはた同じ難波なる」と、御心にもあらでうち誦じたまへるを、御車のもと近き惟光うけたまはりやしつらむ、さる召しもやと例にならひて懐に設けたる柄短き筆など、御車とどむる所にて奉れり。をかしと思して、畳紙に、

みをつくし恋ふるしるしにここまでもめぐり逢ひけるえには深しな

とてたまへれば、かしの心知れる下人してやりけり。駒並めてうち過ぎたまふにも心のみ動くに、露ばかりなれど、いとあはれにかたじけなくおぼえてうち泣きぬ。

数ならでなにはのこともかひなきになどみをつくし思ひそめけむ

田蓑の島に禊仕うまつる御祓のものにつけて奉る。日暮れ方になりゆく。夕潮満ち来て、入江の鶴も声惜しまぬほどのあはれなるをりからなればにや、人目もつまずあひ見まほしくさへ思さる。

露けさのむかしに似たる旅衣田蓑の島の名にはかくれず

引用の中の波線④は、『拾遺集』卷十二・恋二にある元良親王の、

わびぬれば今はたおなじなにはなる身をつくしてもあはむとぞ思ふ(七六六)

に拠るものである。また、波線⑤の表現は、『古今集』卷十七・雑歌上に収められている、よみ人しらずの歌、

なにはがたしほみちくらしあま衣たみのの島にたづなき渡る(九二三)

を踏まえている。神楽歌の前張の部にも、

難波濁 潮満ちくれば 海人衣 海人衣 田蓑の島に 鶴立ちわたる(三七)

という歌謡がみえており、田蓑島が祓の場であるとともに、歌枕として認知されていたことが知られる。波線⑥は、源氏の和歌であるが、『古今集』卷十七・雑歌上の貫之の前出歌、

あめによりたみのの島をけふゆけど名にはかくれぬ物にぞ有りける(九一八)

を本歌とするものである。「源氏物語」「落標」の巻に描かれた難波の祓の世界は、このように、落標で知られる難波、歌枕で知られる難波、同じく歌枕で知られる田蓑島、祓の場として知られる田蓑島など、多様な広がりを見せている。

「乙女」の巻では、五節の舞姫に選ばれた、近江の守良清の娘と摂津の守惟光の娘とが、「近江のは辛崎の祓、津の守は難波といどみてまかでぬ」とあり、互いに張り合う様子の一つとして、祓の場所も競ったことがわかる。辛崎は難波とともに七瀬の祓に挙げられている場所である。

『栄華物語』では、巻第三十一「殿上の花見」で「難波の祓」が描かれている。それは、女院彰子が、長元四年（一〇三二）九月二十五日に、住吉、石清水詣に出立する場面である。石清水参詣ののち、二十八日には住吉に詣でて、祓を行なった。そこからそのまま天王寺に参詣するが、その様子を土地の人々が埋めつくすようにして見物している。そのなかの「年老いたる人」がこの行幸を迎える光榮について述懐したものが、次の引用である。¹⁰

陸奥とをちの里などに住ひせましかば、かかる御幸にあはましや。この年ごろは、難波の浦の何ともおぼえず、長柄の橋のながらへても、何にかはと思ひしに、今日こそ、さは年ごろ送りし蘆の宿り、柴の扉も、げにすみよしに造りてけりとうれし。綱手のめでたきことのためしには、さはこれをこそ引かめ

「難波の浦」が「何」を導き、「長柄の橋」は「ながらへて」に繋がり、難波の「蘆」を引き、「すみよし」には、「住吉」と「住みよし」とを掛ける表現に、住吉の具体的歌枕像をみることができる。

一行は二十九日に帰途につくが、その帰路に難波の祓が行なわれているのである。十月二日には、天の河という所で、「住吉の道に述べ懐」という題で歌会を催している。左衛門督師房による次の歌、

住吉の岸の姫松色に出でて君が千世とも見ゆる今日かな

をはじめ、十七首がそこに記されているが、内容の多くは、賀の歌、神祇の歌、旅の歌である。「難波の祓」を特によんだものは、みあたらない。女院の帰洛は、十月三日のことであった。

『栄華物語』での「難波の祓」は、住吉参詣の旅でのことで、七瀬の祓の一つの場所として描かれているのとどまるのは、『源氏物語』「少女」の巻と同様である。

物語に描かれた「難波の祓」は、物語の旅と密接に結びつくものといえる。そこでは、「祓」そのものの儀式ではなく、難波の情景描写が主題となっている。このように、物語における「難波の祓」は、旅という空間性が意味をもって語られていると考えられるのである。この

ことは、和歌における「難波の葦」が、「難波」の情景歌の一面をもつことにも通ずるが、和歌の場合は、「葦」の歌への展開の側面も認めねばなるまい。

〔注〕

- (1) 『神道大辞典』(臨川書店)、『神道事典』(弘文堂)など参照。
- (2) 引用は、『源氏物語古註叢刊第二卷』(武蔵野書院)による。「花鳥余情」第九、一二四頁。
- (3) 注(1)に同じ。
- (4) 『新後撰集』の引用は、新編国歌大観本による。歌番号も、それに従う。
- (5) 『万葉集』の引用は、日本古典文学大系本による。
- (6) 『拾遺集』の引用は、新編国歌大観本による。
- (7) 『伊勢集』の引用は、私家集大成中古1による。注(6)に同じ。
- (8) 引用は、私家集大成中古1による。
- (9) 『古今集』の引用は、新編国歌大観本による。
- (10) 注(9)に同じ。
- (11) 『後拾遺集』の引用は、新編国歌大観本による。
- (12) 長柄と葦との取り合わせは、「葦間より見ゆる長柄の橋柱昔の跡のしるべなりけり」(拾遺集・巻八・雑上・四六八・清正)、「朽ちにける長柄の橋を来て見れば葦の枯葉に秋風ぞ吹く」(新古今集・巻十七・雑歌中・一五九六・実定)などの例がある。
- (13) 注(9)に同じ。
- (14) 注(9)に同じ。
- (15) 注(9)に同じ。
- (16) 注(9)に同じ。
- (17) 注(9)に同じ。
- (18) 注(9)に同じ。
- (19) 注(9)に同じ。
- (20) 注(9)に同じ。

- ⑴ 注(9)に同じ。
- ⑵ 引用は、私家集大成中古目による。
- ⑶ 注(2)に同じ。
- ⑷ 注(2)に同じ。
- ⑸ 久保田淳『新古今歌人の研究』(東京大学出版会)、五一―四頁。
- ⑹ 前に述べたように、『古今集』にある貫之の、「あめによりたみの島をけふゆけど名にはかくれぬ物にぞ有りける(雑歌上・九一八)」が、難波の祓のおりの作である可能性は高いが、歌そのものは、「祓」を題材としていないので(こゝでは省く)。
- ⑺ 『後撰集』の引用は、新編国歌大観本による。
- ⑻ 注(6)に同じ。
- ⑼ 『新古今集』の引用は、新編国歌大観本による。
- ⑽ 『千載集』の引用は、新編国歌大観本による。
- ⑾ 『大和物語』の引用は、日本古典文学全集本による。
- ⑿ 注(6)に同じ。
- ⑿ 『拾遺抄』の引用は、新編国歌大観本による。
- ⑿ 注(10)に同じ。
- ⑿ 注(12)に同じ。
- ⑿ 注(6)に同じ。
- ⑿ 注(10)に同じ。
- ⑿ 『源氏物語』の引用は、日本古典文学全集本による。
- ⑿ 注(6)に同じ。
- ⑿ 注(10)に同じ。
- ⑿ 神楽歌の引用は、日本古典文学大系『古代歌謡集』による。
- ⑿ 『栄華物語』の引用は、日本古典文学全集本による。